全国草原再生ネットワーク

草原がつなぐ、人・自然・文化

ニュースレターvol. 9（*Jan.*, *2012*）

＜発行＞全国草原再生ネットワーク
http://www.sogen-net.jp/

■新年のあいさつ

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

日頃より、草原再生ネットワークの活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。本年も一層のご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

さて、昨年は、私たちにとって本当に忘れられない年となりました。皆さまご存知のとおり、3 月 11 日の未曽有の東日本大震災に多くの人々が言葉を失い、日本社会全体が閉塞状態に陥ってしまいました。当然のことながら、全国での草原再生の取り組みも少なからぬ影響を受け、活動をしばらく休止せざるを得なかったということも聞き及んでいます。

大震災からはや 10 カ月が経ち、私たち日本人が得た教訓は「絆（きずな）」、人と人が支え合い、助け合っていくことの大切さでした。阿蘇の草原が育んだ地下水が被災地に届けられ、また、被災者用の住宅の断熱材として御殿場市やみなかみ町の草原の茅（かや）が提供されたとのニュースを耳にしました。関係者はもちろんのこと、草原保全にかかわる私たちにとっても大変うれしい出来事の一つでした。改めてこの「絆」を深めることの大切さを心にきざむことにより、人と自然の共生によって創りだされた日本の草原を、未来へとつないでいくことができるものと確信しております。

当たり前の日常を過ごせること、そして、活動できることの幸せを噛みしめながら、自分たちにできることを積み重ねて、かけがえのない草原を次の世代に継承できるよう新たな一歩を踏み出そうと思います。昨年の苦難を乗り越え、光に満ちあふれる笑顔の年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

（高橋佳孝：全国草原再生ネットワーク会長）

■第 9 回全国草原サミットについて

◇実行委員会の設立総会が開催されました！

2011 年 12 月 21 日、「第 9 回 全国草原サミット・シンポジウム in みなかみ」（10 月 27 日～29 日）の実行委員会設立総会が、みなかみ町利根沼田広域観光センターにおいて開催されました。前回開催地である北広島町との連携を図るため、僕も会議に出席しました。全国草原再生ネットワークからは、高橋佳孝会長も委員として参席しています。

群馬県みなかみ町は利根川の上流域に位置し、面積は 781ha と、町村としては全国で 16 番目に広い町です。一方、人口は約 2 万 2 千人で、面積が広くて人口が少ないという点や、海がない内陸に位置するという点も、北広島町と共通しています。しかし、みなかみ町は単なる「山奥の田園地帯」ではありませんでした。関越自動車道、在来路線に加えて、新幹線の上毛高原駅があるので、東京駅から 74 分で訪れることができます。広島からでも約 5 時間と、非常に交通アクセスの良い場所です。一方、新潟県との境には、谷川岳や武尊岳などの名峰が並び、町

の 84%にわたる国有林を有しています。また、利根川の源流にあたり、首都圏の水源となる 4 基のダムを持つなど、経済的にも保全の面でも貴重な自然を有する町です。観光面でも、多数の温泉をはじめ、谷川山系の登山や、ラフティング、バンジージャンプなどのアウトドアアクティビティも盛んです。

これほどの自然を擁しているみなかみ町で、森林塾青水は上ノ原の町有地 21ha を借り受け、様々な取り組みをしています。草原の面積はごく小さなものですが、入会地の再生を目指した取り組みは、春の火入れから始まり、生物多様性に関する調査、茅刈り講習会&コンテストなど、多岐にわたります。特にすばらしいのは、生産された茅を地元の人が刈り取って出荷することができるような流通の仕組みを作っていることです。森林塾青水は、地域・行政・企業の間に入り、知識と環境支払の制度を提供することで、茅と技術の流通を図っています。

今回の実行委員会設立総会には、みなかみ町長、教育長、町議会議長をはじめ、役場各課の課長や、

設立総会の様子

観光協会や商工会の代表の方たちがこぞって出席されていました。もちろん地元からも地域の代表の方や民宿組合長さんが列席され、力強い発言をされていました。サミットに向けての準備は始まったばかりでしたが、10 月の開催が楽しみな、熱気のある会議でした。全国草原再生ネットワークとしても、この会を一緒に盛り上げて参りましょう。

（白川勝信：広島県北広島町）

■各地からの報告

◇日本茅葺き文化協会の取り組み

＜茅葺きフォーラムの開催＞

茅葺き文化と技術の継承と振興を共に考え、また茅葺きに関わるネットワークを広げるため、毎年春に全国各地で「茅葺きフォーラム」を開催している。前身の茅葺きネットワークで 2000 年から毎年開催しており、法人化してからは、第一回となる 2010 年は世界遺産合掌造り集落の富山県南砺市で、第二回は鹿児島県南九州市知覧にて開催した。2012 年は茅葺きの温泉旅館の残る福島県天栄村で開催予定である。

今年度の鹿児島大会では、「茅葺きは地域資源」「茅葺き職人談義」をテーマにフォーラムを開催した。開催地報告として、麓集落の武家屋敷群を中心とした知覧の町並みと知覧型二ッ家の茅葺き建物について報告があった。さらに、第一セッションの「茅葺きは地域資源」では、「地域資源としての二階堂家住宅」二階堂行宣氏（高山二階堂家第十五代）、「阿蘇の草資源利用の多様性」中坊真氏（NPO 九州バイオマスフォーラム事務局長）、「地域資源と茅葺きの宿」田島健夫氏（忘れの里雅叙苑代表）

知覧武家屋敷（鹿児島県南九州市）

青井阿蘇神社拝殿（熊本県人吉市）

青井阿蘇神社楼門

の３名により、事例紹介があった。文化財、草資源、観光資源と茅をそれぞれの立場からとらえ、茅を地域資源ととらえ継承するには、新たな利用法や価値を見出だし、アピールする必要があると語った。第二セッション「茅葺き職人談義」では、「国宝青井阿蘇神社の葺き替え」中村澄治氏（球磨葺みこし屋根）、「阿蘇の茅刈りと茅葺き」小川剛史氏（肥後茅葺き屋根工事）、「日田の杉皮葺き」上村淳氏（奥日田美建）、「知覧茅葺屋根技術保存会の取り組み」永崎一男氏（知覧茅葺屋根技術保存会）の４名によって事例紹介と職人談義が行われた。材料供給の方法、屋根のかたちやその技は地域色豊かで、全国から集まる会場の職人からも熱心に質問がされた。さらに翌日の見学会では、鹿児島県内で、知覧武家屋敷、霧島市の茅葺きの宿「雅叙苑」を見学した後、熊本県人吉球磨地方の見学を行った。人吉球磨地方には、日本で唯一の茅葺きの国宝である青井阿蘇神社をはじめとし、多くの社寺建築を中心とした茅葺き建物が残されており、その中から、岩屋熊野座神社、青蓮寺阿弥陀堂、明導寺阿弥陀堂、太田家住宅を見学した。

城泉寺（明導寺）阿弥陀堂（熊本県湯前町）

＜茅刈り、茅葺きワークショップの開催＞

秋には、茅刈りや茅葺きのワークショップを開催し、昨年度より、文化庁ふるさと文化財の森システム推進事業普及啓発事業として、五箇山の茅場と茅葺き文化の維持保全活用をはかるための普及啓発事業を行っている。

五箇山では、集落に近いところから田畑として利用し、茅場は未利用地の山の急斜面にある。相倉集落の茅場は日向なので、茅を刈り取ってそのまま茅場で干してから結わえて運搬し、昔はそのまま秋に屋根葺きをしていた。一方の菅沼集落の茅場は日陰なので、茅を刈り取ったらすぐに結わえて、集落に運搬して、まず雪囲いにして乾燥し、雪溶けの春に屋根葺きをするという違いがあった。10 月に行った茅刈りワークショップでは、菅沼の茅場で刈って、運搬して、雪囲いを体験し、相倉の茅場では刈って、干すという体験をした。また、菅沼集落では過疎化と高齢化により、茅刈りを森林組合に任せていたので、茅を刈ったことのない住民がほとんどだった。そのような状況の中、昨年度の茅刈りと茅葺き体験ワークショップと市民講座を通じて、気運が高まり、今年度は、菅沼集落の住民が参加者と一緒に茅刈りを行うことができた。さらに、菅沼集落では、新しい茅場の造成のため、参加者とともに茅の植株を行った。同時に開催した茅葺き文化講座では、草地の多様な生き物の生態や、茅場の再生と利活用の取り組み、五箇山の茅場の歴史について学んだ。

五箇山相倉合掌造り集落（富山県南砺市）

急斜面にある五箇山の茅場

茅刈りワークショップの様子

翌月の茅葺きワークシ

ョップでは、各地の若手職人が参加する技能研修と一般市民の体験研修のコースに分かれ、五箇山の茅葺きの技を学んだ。同時に開催した茅葺き文化講座では、同じ合掌造りでも白川郷と五箇山では、葺き方が異なることや、地域色豊かな茅葺きの技を職人から学んだ。

雪囲いにして茅を乾燥する

茅の植株

茅葺き技能研修　破風を葺く

＜仮設住宅の屋根の断熱材に茅を使う～東日本大震災復興支援＞

2011 年 6 月 7 日、仮設住宅が建設されているいわきニュータウンに 4 トン車に満載された山茅が届いた。送り主は御殿場の富士勇和産業。さらにその支援の輪は広がり、森林塾青水の清水塾長を通じて、群馬県みなかみ町藤原地区から、さらに茨城県の“やさと茅葺き屋根保存会”からも会津若松の仮設住宅建設現場に山茅が届いた。

震災直後、当協会に富士勇和産業代表の長田さんから、今回被災した茅葺き民家があればその補修の材料として、2000 束提供したいと申し入れがあった。しかし、被災した茅葺き民家からの要請はなかった。

仮設住宅の屋根の断熱材に茅をつかう（福島県いわき市）

化粧野地と野地板の間に断熱材として茅を入れる

一方、被災者のための応急仮設住宅建設が始まり、福島県では、地域産材の利用と職人の雇用促進のために、木造仮設住宅の建設を決定し公募した。それに対して、当協会代表理事の安藤邦廣（筑波大学教授）がかねてより技術開発をすすめていた、板倉構法による仮設住宅の提案を行い、福島県いわき市と会津若松市に 200 戸の建設が決まり、工事が始まった。その中で、グラスウールなどの断熱材が不足し、また、廃棄物を出さず自然素材だけでつくりたいという考えから、茅を断熱材として使うアイデアが生まれ、長田さんより申し入れがあった茅を仮設住宅の屋根の断熱材として使用することが決まった。

茅葺き屋根の補修には使えなくとも、被災者の支援に役立てたいという目的に適い、あわせて茅の新たな需要開拓にもつながるという考えに、長田さんも賛同し、茅による断熱材使用が実現したのである。板倉構法の屋根は、垂木をはさんで 1 寸厚のスギ板二枚張りとしている構法で、その間の空気層に茅を入れて、断熱性を高めるという設計である。これでグラスウールと同等以上の断熱性能が得られる。また、使用後は、茅としての再利用、あるいは傷んだ部分は肥料として土に還る。現代の茅葺き屋根といっても過言ではない独創的な屋根が出来上がった。

茅の多目的利用や新たな需要開拓の必要性については、当協会のフォーラムでもたびたび議論されてきたところであり、震災というこの危機を乗り越えるにあたり工夫された新しい茅の利用法として注目し、期待したい。（「茅ふきたより 3 号」原稿に加筆修正）

（上野弥智代：日本茅葺き文化協会理事）

◇『阿蘇の草原を未来へつ・な・ぐ集い』～阿蘇草原再生フォーラム 2011-Part1～が元気に開催されました！

昨年（2011）10 月 26 日に熊本市内のホテルで開催された「阿蘇草原再生フォーラム 2011-Part1」は、阿蘇の草原を、次世代の子供たちに引き継いでいこうとする取り組みの大きな一歩となりました。

基調講演（第一部）では、熊本地域地下水循環に関する研究の第一人者である市川勉東海大学教授が、スライドを使って、阿蘇を源とする熊本地域の水循環のしくみとその恩恵に浴していること、そしてそのことから考えていかなければいけないことについての提言が次の通りありました。

①熊本地域の水循環のしくみを支える好適条件

・熊本地域は阿蘇山の度重なる火山活動によって優良な帯水層を包含した場所に位置し、地盤沈下を発生させる粘土層がほとんど無く、地下水利用の上ではまさに適地である。

・上流には広大な阿蘇カルデラを持ち、火山によって形成された高い浸透能力を持つ土壌の上に広大な森林、草地によって降雨流出の速度を抑え、常に白川の流れに水が供給されるシステムが成り立っている天然の優良水循環地域で、さらにその白川の水を利用した水田地帯が地下水を発達させるシステムが整った地域でもある。

・熊本地域の水循環は、阿蘇山の森林･草地・農地と白川中流域をはじめとした農地で形成されている。

②森林、草地、水田によって形成された地下水がこの地域の人々に長く恩恵を与え続けている。

③提言

・これらは、いずれも人のケアーによって成り立つものであるが、今やいずれもが困難にさらされ続け、危機に瀕している地域もある。

・これらは人間の食を支えるだけではなく、水循環を健全化する役目も負っている。

・熊本地域の地下水を保全するためには、上流から下流まで一貫した保全策を講じること、すなわち、阿蘇の森林・草地を守ること、農業を守ること。これが我々のもっとも必要な水と食を守ることにつながる。

基調講演される市川教授

フォーラム第二部の様子

第二部では、阿蘇草原の公益的機能について考えるパネルディスカッションが行われました。

まず 4 人のパネラーからそれぞれの立場で、公益的機能（恵み）および現状などについて、草原の景観や生物多様性の価値、地球温暖化の原因となる二酸化炭素を吸収・貯蔵する機能やバイオ燃料の可能性､地元で行なう農畜産業と草原環境教育の重要性、野焼き支援ボランティアとして関わるきっかけと阿蘇草原の魅力などについて、それぞれ紹介されました。

続いて、会場参加者から阿蘇地域内での飲食代の一部を募金としたり、抜本的な税制支援策を求める意見、世界文化遺産登録の必要性、草原特区についてなど活発な意見や提案がありました。さらに各パネラーからの発言と会場からの発言がありました。最後に、コーディネーターの米澤和彦氏が要旨を次のようにまとめて終了しました。

①21 世紀は水の時代として捉えよう。地下水は公共水であることを普及啓発する。水はタダでないことを社会に啓発していきたい。

②阿蘇は九州の水がめであり、これを守る意識を地元熊本から広げていく。そのことが　やがて到来するであろう州都づくりへの議論の契機となり、その時の熊本県民の心意気や誇りとして重要な役割を果たすことになるだろう。

③阿蘇の草原の多様かつ多面的で公益性の高い恵みをどうやって守っていくか。このことについては阿蘇草原再生千年委員会の元に､2 つの「恒久財源」「世界文化遺産」に関する専門作業部会を設置したので、これらを通じて今後提言作りに入る。

＜おわりに＞

熊本都市圏の飲料水が 100%地下水で賄われていることは、全国都市の中で稀有な事例であることは知られ始めていますが、そのしくみとして、源の阿蘇地域とつながりあっていることがあらためて明らかにされたことは大変重要な意義がありました。そして、このことも含めてどのように守っていくのかを参加者約 200 名のほぼ全員が一体となって検討できたことは、今後の世論形成や運動の流れにとって大きな弾みを与えてくれたようです。

（宮永整一：阿蘇グリーンストック）

◇千町原の秋の草刈りに参加しました

2011 年 11 月 23 日（木）の勤労感謝の日、北広島町・八幡高原で行われた「千町原の秋の草刈り」イベントに参加しました。私は初参加でしたがこのイベントは今回で第 8 回目を迎え、近くは家が 200m しか離れていない近所の方から、遠くは京都や兵庫の方まで、府県を超えて 100 名以上の参加者が集まりました。

初めにイベントのスタッフやリーダーの方から、作業の目的や安全に関する注意のお話がありました。今回の草刈りの目的は草原とアカマツ林との間の防火帯を作ることと、カラコギカエデやノイバラ等の樹木が侵入しているエリアの樹木の伐採でした。今回から採用された色（赤・黄色・緑・青・ピンク）と数字の描いてあるゼッケンで班ごとに分かれ、さらに赤の帽子をかぶった草刈りリーダーと緑の帽子をかぶったスタッフの指示のもと、経験のある人は刈り払い機で草を刈っていきます。私を含め多くの参加者は主に刈り取った草や木を集めて運ぶ作業をしました。

刈った草を持ち出さずに放置してしまうと地表付近まで光が届かず、発芽できる種が限られてしまいます。さらにススキなどが腐って草原が富栄養化することも、特定の種が優占したり、外来種が侵入しやすくなったりします。多様性の高い半自然草地を維持していくには、刈った草を持ち出して使うことが重要になってきます。今回は草と木を分けて集め、草は近隣の農家の方が肥料にされるそうです。

私の参加したピンク班は樹林化が進行しているエリアの草刈りと樹木の伐採で、チェーンソーも登場しました。作業が始まると、だんだんと草を集める人、木と草を分ける人、木を運ぶ人など役割分担ができてきました。

お昼は地元の野菜がたっぷり入った、とん汁と炊き込みご飯、それに大根の煮物と白菜の浅漬けが用意されました。寒い日だったのであったかいご飯やとん汁は最高でした。

午後からの作業は各班の進度に合わせて少し人数を入れ替えて行われました。作業は予定していた防火帯は全部伐ることができ、樹林化エリアの伐採もかなり進めることができました。作業後に今回刈ったエリアを振り返ってみると、これだけ刈ったんだという達成感がある一方で、この人数でこれくらいの面積だから草原全体を維持していくには大変な労力がいるのだなと感じました。作業終了後は名物の「仕上げ」として国産ラム肉のバーベキューを食べました。ラムは柔らかくジューシーで初めて食べる

作業説明の様子　朝は少し雨模様でした

樹林化エリアの作業の様子

国産ラム肉のバーベキュー

おいしさでした。

今回草刈りのイベントに初めて参加しましたが、草原や草刈りの大切さを伝えること、安全に作業するための注意、美味しいごはんの準備等、イベントとして「楽しく・安全に」作業するためにスタッフの方々の工夫や配慮がすみずみまで感じられ、楽しく過ごすことができました。

（枡田元気：広島大学総合科学部生）

◇12 回目となる官民協働の乙女高原草刈りボランティア

11 月 23 日、乙女高原ファンクラブ・山梨県・山梨市の共催でボランティアを募っての草刈りイベントが行われました。今年で 12 回（年）目となりますが、今まで雨天等で一回も中止になることなく、毎回 200 人を越える乙女高原ファンが集まっています。

今年のトピックスは、ゴミ収集車で刈り草を琴川ダムの残土処分場に運び込み、そこに草原を創出しようという「藁撒き」プロジェクトです。草原を維持するためには刈った草は持ち出すのが原則です。昔は、持ち出した草を肥料や飼料として活用していました。というより、活用するために草を持ち出し、結果的に草原が維持されてきました。

今はそのような「しくみ」がないので、代わりに、残土処分場を緑化しようと考えたのです。ここに乙女高原の草のたねを供給すれば、より早く、より確実に、この地にあるべき草原を創り出せるでしょう。森への遷移もスムーズに進むはずです。しかも、処分場は防鹿柵で囲まれており、シカの食害を防ぐことができます。

ごみ収集車で刈り草を残土処分場に運ぶ

「藁撒き工法」のアイデアは東京農工大の星野義延先生からいただきました。モニタリング調査もご提案いただき、実行中です。大量の草を運ぶには軽

ブナじいさんの前でキッズボランティア

草刈りが終わった草原をバックに

トラではちと荷が重いので、リサイクル会社である（株）田丸からゴミ収集車をお借りしました。田丸からは毎年たくさんの社員の皆さんが草刈りに参加くださっています。

初めてのことだったので、反省点がいっぱいです。一つは、ゴミ収集車は確かにいっぺんに大量の草を運べますが、積み込むに時間がかかったことです。出すのは一瞬ですが、入れる時は少しずつ押し込んでいかねばならず、時間がかかりました。二つ目は林道の路上駐車です。林道に草を出して、それをごみ収集車に積み込むので、林道をかなり独占します。路上駐車があったので、状況はさらに悪化。ほとんど通行止め状態でした。三つ目は積み下ろし作業です。乙女高原と残土処分場が離れているため、少人数で積み降ろし作業をしたのですが、これがなかなかの重労働。昼食前にはみんなグロッキーでした。人数配置のタイミングを工夫する必要があります。

草刈りの記念写真

藁撒き以外にも、「キッズボランティア」として乙女高原裏山のブナじいさんの根元に落ち葉のふとんを掛けてあげようという活動もしました。

乙女高原ファンの熱意と行政との協働によって続いている乙女高原の草刈り。毎年 11 月 23 日に行っています。ご参加ください。

（植原 彰：乙女高原ファンクラブ
代表世話人）
※http://fruits.jp/~otomefc/

◇「秋吉台野火の祭典支援ボランティア 安全対策マニュアル」が作られました

毎年 2 月に行われる秋吉台の山焼きは、昼間行われる地元住民による山焼き（以下、本番の山焼き）と、美祢市観光協会が主催する夜の山焼き「野火の祭典」があります。このイベントは今年で 14 回目になります。

本番の山焼きの後に祭典が行われるため、本番の山焼きでは一部の草原を燃え残すようにします（地図参照）。そのため、草原の中にボランティアが入り、燃え残す部分を背に、周囲から燃えてくる火に向かって迎え火を打つことになります。もちろん、燃え残す部分の周囲には幅 5mほどの火道（防火帯）を作っているのですが、昨年は周囲から迫ってくる火が飛び火したり、防火帯の上を火が走ったりしたため、燃え残す部分もすっかり燃えてしまい祭典は中止になりました。ボランティアは両側から迫る火に怖い思いをしたということでした。

そこで今年は例年とは違う段取りとなりました。変更点は以下です。

1．火が地面を走っていくのを防ぐため、ササの葉が枯れて地面に落ちる前に火道切り作業をする。
2．火道の幅を 8〜10m と広くする。
3．迎え火を打つボランティアの数を増やす。
4．安全対策マニュアルを作ってボランティアに配布する。
5．いつもは本番の山焼きから 2 週間遅れて開催される野火の祭典を、今年は山焼き当日の夜に開催する。

野火の祭典の様子

例年より多い約 120 人のボランティアが参加し、11 月下旬に火道切り（防火帯づくり）作業が行われました。作業後は「火入れ参加者自然研修会」が行われ、消防署員がこのマニュアルを使って安全講習をされたようです。野火の祭典にボランティアとして参加するには、この講習を受けることが必須とされています。

マニュアルの作成には、(財) 阿蘇グリーンストックの「野焼き・輪地切り支援ボランティア 安全対策マニュアル」や森林火災協会の「火入れの手引き」、広島県北広島町での配布資料を参考にさせていただきました。しかし、短期間に少人数で作成したため、内容の検討が不十分なことは否めません。今後改善していけるよう、様々な方面からのアドバイスをいただいているところです。

現在は、本番の山焼きは地元住民の手で行われていますが、過疎化・高齢化がさらに進めば、いずれ多くの外部ボランティアに作業を託すことになると思います。また、地元でも世代交代がおこり、山焼きに関する古くからの知恵や技を受け継ぐことが難しくなるかもしれません。その時に安全面では不備がないよう体制を整えると同時に、こういった配布物も充実することが必要だと思います。これから始まる山焼きの季節、秋吉台はもちろん、どの地域でも無事作業が終わることを願っております。

防火帯づくりの様子

作成された安全対策マニュアル

（文－太田陽子、写真提供－松井茂生：山口県在住）

■書籍紹介

◇「野と原の環境史」　日本列島の三万五千年－人と自然の環境史－シリーズ第 2 巻

日本列島の三万五千年－人と自然の環境史－のシリーズ第二巻として発行されました。一般的に森の国と思われがちな我が国における草原の歴史について、最新の研究結果をふまえ紹介してあります。

編集：湯本貴和
責任編集：佐藤宏之・飯沼賢司
出版社：文一総合出版
￥4,000（税抜）　ISBN : 978-4-8299-1196- 9 C0045

＜はじめに＞「森の列島」における草原

＜第１部　サハリン・北海道の最終氷期の人と環境＞

1 北海道とサハリンにおける最終氷期最盛期の植生－特に草原の発達について

2 最終氷期の環日本海地域における大型哺乳動物相の変遷

3 旧石器時代の狩猟と動物資源

＜第 2 部　完新世の温暖期における半自然草原の出現と環境変化＞

4 堆積物が語る環境変遷

5 日本列島における草原の歴史と草原の植物相･昆虫相

6 阿蘇・くじゅうの旧石器から縄文世界の出現

＜第３部　草原における土地利用と人間活動の歴史的変遷＞

7 弥生～古墳時代の遺跡と遺物からみた草原の世界

8 植物珪酸体と花粉、微粒炭からみた阿蘇・くじゅう地域と人間活動の歴史

9 火と水の利用からみる阿蘇の草原と森の歴史－下野狩神事の世界を読み解く－

10 狩猟と原野

＜第４部　草原利用の現状と未来＞

11 阿蘇山野の空間利用をめぐる時代間比較史－中世・近世・近代－

12 飯田高原における草原の利用と開発

13 くじゅうの観光開発と草原入会地

＜終章＞野と原の「賢明な利用」と重層するガバナンス

■草原をめぐる動き（2012 年 1 月～4 月）

1/29 第 11 回乙女高原フォーラム～希少昆虫の宝庫乙女高原は今（場所：山梨市民会館、連絡先：乙女高原ファンクラブ）

1/29 茅葺き文化の継承とこれからの茅葺き（場所：銀座区民館、連絡先：森林塾青水）

2/11-12 かんじきで歩こう雪の上ノ原（場所：群馬県みなかみ町藤原、連絡先：森林塾青水）
http://commonf.net/pdf/20120110.pdf

2/11-12 野焼き・輪地切り支援ボランティア初心者研修（第 1 回）（場所：熊本県阿蘇市内、連絡先：公益法人阿蘇グリーンストック）
http://www.asogreenstock.com/news/727/

2/18-19 同上（第 2 回）

2/19 秋吉台山焼き（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：美祢市役所）

3/24 三瓶山西の原火入れ（場所：島根県大田市三瓶山、連絡先：大田市役所）

4 月上旬 塩塚高原山焼き（場所：愛媛県四国中央市・徳島県三好市、連絡先：四国中央市役所・三好市役所）

4 月上旬 深入山山焼きまつり（場所：広島県山県郡安芸太田町、連絡先：安芸太田町観光協会）

4/7 千町原山焼き（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）

4/14 雲月山山焼き（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク　ニュースレター　vol.9　2012 年 1 月号

全国草原再生ネットワーク事務局
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1
NPO 法人緑と水の連絡会議内　　Tel. 0854-82-2727　　Fax. 0854-84-0262

【編集後記】新年あけましておめでとうございます。冒頭での会長からの挨拶にもあったとおり、昨年は、東日本震災という悲しい出来事が起こりました。その一方で、第 9 回の全国草原サミットに向けて設立総会が開かれ、大きな一歩が踏み出された年でもありました。ニュースレターでも、会員のみなさまに最新の情報を届けながら、盛り上げて行きたいと思っています。引き続きまして、ご協力をお願いいたします。